

(旧・「京大上海センターニュースレター」)

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

2010年6月7日

目次

- 東アジアセンター協力会総会のご案内
- 京都大学東アジア経済研究センター 主催シンポジウム
「東南アジア市場で競合する中国と日本」
- 「中国経済研究会」のお知らせ
- 京都大学・アモイ大学共同セミナー「日中の企業経営のチャンスと教訓」
- ウズベキスタン近況
- 玉樹地震への支援に感謝して——チベット高原の一隅にて
- 【中国経済最新統計】(試行版)

会員各位

2010年5月24日

東アジアセンター協力会総会のご案内

東アジアセンター協力会会長
森瀬正博

私ども京都大学経済学研究科東アジアセンター協力会に日頃から格別なご高配を賜り心よりお礼申し上げます。

さて、7月12日(月)に第7回総会を開催することとなりました。別紙のように大変魅力あるシンポジウムと合わせて開催いたします。万障繰り合わせの上、是非ともご出席いただきますよう、心よりお願い申し上げます。

なお、シンポジウム終了後は例年どおり京都大学経済学研究科2階大会議室にて懇親会(参加費無料)を予定しております。こちらにも是非ご出席下さい。

記

日時 2010年7月12日(月) 午後1時~1時45分
会場 京都大学経済学研究科(法経東館)2階大会議室

以上

京都大学東アジア経済研究センター 主催
シンポジウム
東南アジア市場で競合する中国と日本

共催 京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター
後援：京都大学東アジア経済研究センター協力会

2010年7月12日(月) 14時
京都大学百周年時計台記念館国際交流ホール

司会 京都大学大学院経済学研究科教授 塩地 洋

14:00-14:15

挨拶 京都大学大学院経済学研究科長 田中秀夫

14:20-15:00

日本貿易振興機構(JETRO) 海外調査部長 高橋 俊樹 アジア新興国に於ける日本企業の市場戦略

15:00-15:40

トヨタ自動車 藤井 真治 永遠に期待される国から、本当に期待される国へ
(元トヨタ・アストラモーター 副社長) —インドネシアの自動車市場の展望—

15:50-16:30

タマサート大学 講師 ソーポン・チタサッチャー タイにおける中国と日本の企業と製品

16:30-17:10

京都大学大学院経済学研究科 教授 大西 広 ラオスにおける中国商人の活動と摩擦

17:10

閉会挨拶 京都大学東アジアセンター協力会会長 森瀬正博

17:30-19:00

懇親会 法経総合研究棟2階大会議室

司会 京都大学東アジア経済研究センター協力会 宇野輝

開会挨拶 京都大学東アジア経済研究センター・センター長 劉 徳強

閉会挨拶 京都大学東アジア経済研究センター協力会 副会長 大森経徳

「中国経済研究会」のお知らせ

2010年度第3回目(通算第10回目)の中国経済研究会は下記の要領で開催されますので、大勢のご参加を心待ちにしています。

記

時 間： 2010年6月15日(火) 16:30-18:00
場 所： 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館3階第3教室
報告者： 大西広(京都大学経済学研究科教授)
テーマ： 「農奴解放前チベット農奴制の生産関数推定による農奴解放効果の研究」

注：本研究会は原則として授業期間中の毎月第3火曜日に行います。2010年度における開催(予定)日は以下の通りです。

前期：4月20日(火)、5月18日(火)、6月15日(火)、7月20日(火)

後期：10月19日(火)、11月16日(火)、12月21日(火)、1月18日(火)

(この件に関するお問い合わせは劉徳強(liu@econ.kyoto-u.ac.jp)までお願いします。なお、6月15日夜に、学長主催の留学生懇親会があるため、いつも行われている有志による懇親会は行いません。)

=====

【予告】

第11回 中国経済研究会

時 間： 2010年7月20日(火) 16:30-18:00

場 所： 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館3階第3教室

報告者： 中川涼司(立命館大学国際関係学部教授)

テーマ： 「中国IT企業家の社会的形成モデルーサクセニアン・モデルの妥当性ー」

京都大学・アモイ大学共同セミナー
「日中の企業経営のチャンスと教訓」

日時 2010年6月17日(木) 13:00-17:00

会場 京都大学経済学研究科大会議室

主催 京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター、厦門大学管理学院

開会挨拶 京都大学東アジア経済研究センター・センター長 劉 徳強

沈 芸峰 厦門大学管理学院院長、教授
「海西経済の発展状況及びそのチャンス」

塩地 洋 京都大学経済学研究科教授、東アジア経済研究センター・副センター長
「トヨタ生産方式と継続的改善活動」

朱 平輝 厦門大学管理学院准教授
「中国企業の多国間オペレーティングモデル」

大西 広 京都大学経済学研究科教授
「戦後日本企業経営者とマルクス経済学」

閉会挨拶 沈 芸峰 厦門大学管理学院院長

参加費 無料

会議後、短い懇親会を開催します。参加希望の方は一週間前に大西までご連絡ください。

ウズベキスタン近況

01. JUN. 10

中小企業家同友会上海倶楽部代表

東アジアセンター外部研究員(協力会理事) 小島正憲

今回のウズベキスタン調査は、最初から難航した。

本来、ウズベキスタンの首都タシケントへは、ウルムチから中国南方航空が飛んでおり、約1時間半で着けるという話だった。だから私は新疆ウイグル自治区のカシュガルの調査も含めて、上海→ウルムチ→タシケント→ウルムチ→カシュガル→上海の予定を立てて進行していた。ところが3月中旬、その中国南方航空便が突然長期欠航となってしまった。残された道は北京→タシケントしかなかった。結局、私はカシュガル行きをあきらめて、北京からウズベキスタン航空で6時間の空の旅をすることになった。

さらに直前になってキルギスタンで政変が起きた。その影響で、同行する予定だった漢族の企業家が日程変更を伝えてきた。そのときすでに私は日本でビザを取得済みで、日時は限定されており、再申請して日時を変更するには時間に余裕がなかった。彼は北京で申請しており、勝手に日程を変更してしまったので、結局、私は彼といっしょにタシケントへ入ると、滞在可能日数が4日間しかないことになってしまった。それでもタシケントでの調査行動は、すべて彼に任せてあったので、それに従わざるを得なかった。東京のウズベキスタン大使館に、「現地でのビザ延長は可能か」と問い合わせしてみたところ、「不可能」というつれない返事が返ってきた。現地の漢族エージェンツに、同様のことを聞くと、「可能。まったく問題がない」という。私はそれを信じて、北京からタシケントへ向かった。

今回の主要な調査目的は、ウズベキスタンへの中国(漢族・ウイグル族)企業の進出度合い、高麗人と韓国企業の

ビジネス状況、宮崎正弘氏の天然ガスパイプライン情報の確認などである。

なお、タシケント到着後、最初の日にジェトロ・タシケント事務所を訪ね、末廣徹所長さんからウズベキスタンの基礎情報を詳しく教えてもらった。

1. チムールの末裔とウイグル族。

ウズベキスタンの首都タシケントの市内の中心部に、大きなチムールの像が立っていた。それはナポレオンのアルプス越えの像のポーズとよく似ていた。チムール帝国の首都はサマルカンドだったが、タシケントの人たちも自らをチムールの末裔と考え、それを誇りにしているようだった。チムール帝国の最大版図は右図のようであり、そこには西方ではイラクやイランから、東方では中国の新疆ウイグル自治区が含まれていた。この時期には、この地域を多くの人間が自由に往来していたわけである。歴史上ではその後、この地域で民族の興亡が繰り返されたが、チムールの末裔を自認するウズベキスタン人とウイグル族は顔もよく似ており、文字や言葉も通じるため、今でも国境に関係なくビジネスを展開している。



※チムール帝国は1370年から1500年まで、西・中央アジアの覇者であった。



《チムールの銅像前で》

タシケント最大の日用品の卸売市場:アブサヒに行ってみたところ、そこには3000軒ほどの店舗がならんでいたが、店員にも買い物客にも、漢族の姿はまったく見当たらなかった。また中古自動車市場や中古部品市場:ファラハダにも行ってみたが、同様に漢族は一人も居なかった。また携帯電話や電気製品を



《アブサヒ卸売市場前で》

扱っているナワイー商店街を歩いてみたが、そこでも漢族には出会わなかった。

アブサヒ市場を見て回っていたとき、同行した漢族の企業家が、「怖いのでホテルに戻る」と言い出した。彼は昨年ウルムチ騒動のときに、現場付近でウイグル族に取り囲まれたことがあり、この市場で同じ顔をした人たちに取り囲まれているうちに、そのときの恐怖を思い出し気分が悪くなったというのである。私たちは彼といっしょに、ひとまずホテルに戻ることにした。この市場を案内してくれたのは同じ漢族であったが、ハルピン育ちのロシア語が上手な人で、ウルムチ騒動などまったく体験しておらず、このウルムチの企業家の臆病な行動に対して怪訝な顔をしていた。

それらの市場で売られているものは、大半が中国製品であった。価格は中国国内より3割ほど高いようだった。ウズベキスタンは2重内陸国であり、中国から運ぶには税関の処理などを含めて、物流がたいへんで経費が高くつくのであろうと思った。市場関係者に買い付けや輸送方法について聞いてみた。すると「私たちが北京や広州、ウルムチなどへ買い出しに行ったり、仲買者に頼んだりしている。買い付けた商品は、運送会社に頼めばまったく問題なくここに着く」と、教えてくれた。

また別の関係者は、「カリモフ大統領の娘が経営する運送会社が、ウルムチ・北京・広州にあり、現地渡しですべてが解決する。2か月ほどかかるが間違いなくタシケントへ着く。現在、われわれが所属する国家はそれぞれ違うが、元をたどればチムールの末裔同士なので、税関などはあつてなきが如しだ」と、話してくれた。つまり商品は密輸に近い状態で、遠方の北京や広州から、2回も国境を越えてタシケントまで運ばれているというのが実状のようであった。買い付けられた商品は、いったんウルムチに集められ、そこから鉄道でカザフスタンへ抜け、ウズベキスタン国内に持ち込まれるという。ちなみに運賃は、20フィートコンテナ換算で、5000~6000US\$だという話だった。

そしてその自称チムールの末裔の男は、おもしろい話を聞かせてくれた。「昔から、カシュガルの近くのアルトシュという街には、商売の上手な人間が集まっていた。そのアルトシュ人の多くが、1962年に中ソの関係が悪化し始めたときに、いっせいにカザフスタンやウズベキスタンなどの旧ソ連側に逃げてきた。そして大半がそこに留まったが、一部

は世界に散らばっていき、現在、ウイグル族の世界ネットワークを形成している」というのである。私は彼の話を、にわかには信じる事ができなかつたので、その日の夜、新疆の地図を広げ、カシュガル付近を丹念に見てみた。するとそこには、たしかに阿図什という地名があった。なお、1962年の4月から6月にかけて、約6万人のウイグル族やカザフ族が新疆のイリ・カザフ地区からソ連へ亡命したという。いずれにせよ、ウズベキスタン首都タシケントの地は、漢族が圧倒的に少数であり、ビジネス界を始めとしてウイグル族の勢力が強い地域であると、私は見た。

2. 高麗人と韓国企業。

昨年末、極東ロシアを訪れたときに、ウスリースクで現地の朝鮮人から高麗民族博物館を紹介してもらった。そこで



館長さんから、「戦前、この地にいた朝鮮人がスターリンの指示によって、ウズベキスタンとカザフスタンに強制移住させられました。その数は20万人を超えました。移住先のウズベキスタンは荒地で、飢えに苦しみ、そこで10万人が命を落としました。生き残った人たちは懸命に働き、荒地を開墾し、緑野に変え、時のソ連政府から表彰されるほどになりました。彼らは高麗人と名乗り、その地で胸を張って生き抜いていきました。ソ連崩壊後、高麗人の一部が故郷に戻ってきて、この地に高麗民族博物館を建てたのです」と、説明を受けた。下記は高麗民族博物館内にあった強制移住の行程図をデジカメに収めて帰り、それを基に私が再現したものである。

タシケントの南方50kmほどのところに、高麗人の移住先がある。そこには立派な記念館が建っており、この地で奮闘した高麗人の記録が残っていた。この記念館には「キン・ペン・フワ」という個人名がつけられており、この地で財を成した高麗人が建てたものだということだった。中には、高麗人たちがソ連政府から表彰されときの、立派な勲章をたくさん胸につけた高麗人の写真が100枚ほど飾ってあった。共産党に入り、この地の安定に尽くしたり、軍人になったりした人も少なくなかったようだ。



出口に参観記念ノートがあったので、パラパラとめくってみた。1年分ほどさかのぼって見てみたが、さすがに日本語は見当たらなかった。私は日本語で、私がお訪ねした理由を書き、高麗人の努力や生き様に敬意を評しておいた。

この記念館の周囲は、一面、見渡す限りの緑野で、それを見ながらすがすがしい薫風に吹か



《 キン・ペン・フワ記念館 》

《 高麗民族博物館 》

れていると、あの極東ロシアの半年間は雪に覆われる凍土の地よりは、はるかにこの地の方が恵まれているような気がした。記念館の管理者は高麗人だということで、韓国語で自己紹介を試みたが、反応はなかった。すでに多くの高麗人は現地化しており、朝鮮語を話せないという。高麗人はこの地で綿花栽培を成功させ、特産品にまで育てあげた。私は集落の中に足を踏み入れ、1軒ずつ家庭を見て回った。ほとんどが土塀に囲まれた広い家であり、中庭には野菜が植えてあり、日除け兼用で葡萄棚が作ってあった。それらの家は貧しいという感じはしなかったが、さりどて豊かであるという感じも受けなかった。村には灌漑設備がしっかり作ってあり、中央には幼稚園や学校も整えてあり、モスクもあった。教会は見かけなかった。

第2次大戦後、生き残った高麗人たちは、再び悲劇的な人生を歩んでいったという。懸命に生き抜き、この地の開拓を行い、旧ソ連邦の経済発展に尽くした高麗人は、朝鮮戦争の勃発に際して、旧ソ連政府の要請に応じて、志願してその戦いの地に赴いた。彼らはそこでも献身的かつ勇敢に戦った。さらに休戦後もその地に残り、国の建設に協力した人が多かったという。ところが時の経過と共に、彼らの消息がわからなくなっていったという。どうも政争に巻き込まれ、粛清されたのではないかとこのうわさであった。

ソ連崩壊後、韓国企業がこの地で出世した高麗人(中には上院議員や大統領とのパイプ役を担える人もいるという)を頼り、低賃金と市場確保、韓国政府の後押しによる資源確保などを目的にしてウズベキスタンへ進出した。ことに自動車の大宇はただちに工場を作り、生産を開始した。今、ウズベキスタンで走っている車の半数ほどが、大宇の現地生産車である。その後、大宇は本国の親企業が不振となったため、現在ではGMがこれらの工場を肩代わりして稼働させている。また韓国企業は、この地の特産品の綿花を利用した繊維業などの工場を稼働させ、その他ではホテルや多くの娯楽産業にも手を出し、成功しているということだった。対ウズベキスタン投資は92年から09年までの累計ベースで157件、5億ドル超を記録しており、ウズベキスタンに在留している韓国人は2000人ほどだという。

最近、政府が打ち出している経済特区(ナボイ)への進出においては、多くの韓国企業が名前を連ねているが、実際のところは半数以上が、大半が契約調印を済ませたのみで、本社側では進出に否定的なところが多い。なお、ウズベキスタン政府側の投資計画による2010年以降の韓国企業の投資予定額は、21億ドルである。

3. 石油利権と中国人(漢族)。

トルクメニスタンからの天然ガスの輸送については、すでに2009年12月14日から開始されていた。中国とトルクメニスタンは年間300億立方メートルのガスを30年間に渡って供給する契約を結び、それを2本のパイプラインで、ウズベキスタンとカザフスタンを經由して新疆へ送り込む予定であり、その敷設図は右記のようである。そのうち1本はすでに完成済みで、現在は2本目が敷設中であり、2010年9月に完成予定、300億立方メートルの契約量に達するのは2011年末ごろになる予定。私はブハラまで行って、この工事現場を見て宮崎正弘氏の説の確認をしたかったが、残念ながら時間がなく断念した。



ところがタシケント滞在最終日に、お土産を買うために市内中心部のミニデパートに行ったところ、そこで漢族とおぼしき人たちのグループに出会った。彼らはどう見ても労働者風だった。話しかけると、彼らは中国石油(ペトロチャイナ)の従業員で、ブハラ周辺で天然ガスのパイプラインの埋設工事をしており、3か月の契約期間を終わり、次の新メンバーと交代し、今晚のフライトで帰国するのだという。私は彼らの証言から、宮崎氏の説は正しいと確信した。

その晩の北京行きの飛行機は、このような漢族労働者が満杯であった。彼らは空港でも香水やチョコレートなどを買い漁っていた。それを見ていて、やがてこのウズベキスタンも漢族パワーに押さえ込まれる日が来るのではないかと、私は思った。なおこのような中国石油関係者は、天然ガスのパイプライン敷設だけでなく、ウズベキスタンの石油開発にも従事し、全国に散らばっており、その総数は3~4万人ではないかと推測されているという。なお、現在のところ、タシケントにはチャイナ・タウンはない。ただし中華料理レストランは10軒ほどある。今回私がお世話になったハルピン出身の漢族も、中華レストランを経営しており、私はそこで何回も食事を取った。

そこには毎日、いろいろな案件を抱えた漢族が入り出ており、情報交換の場所としても利用されていた。ある日のこと、30代後半と見られる漢族女性が、パスポートを片手になにやら頼んでいた。彼女はウルムチ出身であり、キルギスタンでビジネスを行っていたが、政争を嫌って1週間ほど前にタシケントにきたという。しばらくはこの地でビジネスを行いたいの、居住許可を取得して欲しいと頼み込んでいるという事であった。

この店に来るお客さんたちが、一様にポリ袋を重そうに持って来るので、何だろうかと思って見ていると、それは食事代金を払うためのお金だった。私はそれを見ていて、かつてベトナムで食事代金を支払うために、お客さんがリュックサックにお金をいっぱい詰め込んで持ってきて、お金を支払うのに30分ほどかかっていたことを思い出した。ちなみにこのレストランの麻婆豆腐は6000スフ、近くのマックみたいな店のハンバーガーは4500スフだった。公定レートは1ドル=1582スフであるが、闇レートがあり約1.5倍。この店のウェイトレスの日給は15000スフだということであった。直近10年間のスフの下落率は250%。

なお、中国とウズベキスタンとの貿易は、ウズベキスタン側の大幅入超であり、機械設備を筆頭にして、衣料品や雑貨など多岐にわたっている。ウズベキスタン政府発表の2010年以降の中国企業の投資額は、38.5億ドルで韓国企業を上回る。

4. 日本人の影薄し。

ジェトロの末廣所長の話によれば、日本企業の投資は低調で、案件としては3件。企業関係者では商社を中心とし

た駐在員事務所が大半で、そのほかには物流関係の法人が3社。ウズベキスタン在留邦人は約120人だということであった。もちろん私はタシケント滞在中、末廣所長以外の日本人には出会うことがなかった。

5. その他 トルコ、スイスの進出。

ソ連崩壊直後、この地に最初に進出してきたのは、トルコ企業だった。トルコ人は風貌がウズベキスタン人と似ていることや、同じイスラム教徒であることなどでウズベキスタン人を信用させ、まだ資本主義の商売に慣れていない彼らを手玉にとって、荒稼ぎをしたという。ちょうど中国の改革開放直後に、香港企業が中国を席卷したようなものだったのだろう。現在でも、タシケントにある主要なビルのオーナーには、トルコ企業が名を連ねているという。私がお土産を買ったミニデパートもトルコ資本だと聞いた。

ジェットロの末廣所長の話によれば、スイスのネスレが2000年にこの国に進出し、フェルガナ地方で乳牛を育て、国内の乳製品市場をほとんど押さえってしまったという。たしかにお土産のチョコレートはネスレのものが多く、試供品を食べてみたが、結構美味しかった。

6. 参考資料。

- ・人口 : 約2750万人
- ・面積 : 約44万7千万平方km
- ・人口密度 : 59人/1平方km
- ・公用語 : ウズベク語
- ・民族構成 : ウズベク人=80%、ロシア人=6%、タジク人=5%、カザフ人=3%、その他=6%。

玉樹地震への支援に感謝して

—チベット高原の一隅にて—

阿部治平（中国青海省在住日本語教師）

日本へ留学した私の学生諸君

君たちが日本で、4月14日郷里の青海省玉樹蔵族自治州ジェクンド（結古）県でおきた地震災害を訴えて、40数万円も義捐金を集めてくれたことに対してあらためてありがとうございます。また応募して下さった方に心からお礼申し上げます。

こちらからお礼の意味で私が聞きとった支援機関、ボランティアの話の順不同に列挙します。これから災害後の状況を読みとってください。

全体として政府の被災対策は、かなり順調である。ジェクンドの町に限り衣食住の問題は基本的にないと判断できる。中央政府は四川地震の教訓を学んでいる。西寧市内の病院にまだ入院している人は重傷者だが、医療費は政府負担だ。小さな病院の場合看護要員が不足している。

玉樹の人が避難してきたので地方都市では部屋代が上がっている。西寧の場合60平方メートル位の部屋が400元だったのが1000元に上がった。またそういうところでは避難者の児童生徒の就学が心配だ。

ジェクンドの95%の建物が倒壊した。住宅が壊滅状態になったのは、煉瓦の家に鉄筋が入らなかったうえに「かすがい」がなかったからだというあなたの意見は正しいかもしれない。中が木造の家には倒れなかったものがあった。ビルもかなり壊れたが、四川地震の時のように政府機関は丈夫にできていた、学校はだめだったということはない。

町の様子は写真じゃわからない。外見だけで大丈夫だと思うのはまちがいだ。中に入ると危なくて使いものにならない。一番ひどくやられたのはリンカ（公園）を中心とした地域だ。ジェクンドのチェングス=ゴンパは再建不能。ジェクンドで一番大きいジェクンド=ゴンパはかなり残ったのでそのまま再建できる。家の再建は、住宅・学校・病院を優先、そのほかは後回しになるのは仕方ない。

環境保護のため牧畜をやめて地方の町に移住させられた「生態移民」は、ジェクンド郊外に375戸あった。そのうち300戸はペしゃんこになった。75戸はかろうじて立っているが住めない（阿部注、これらの家は4つの建築会社が建設期間1年の契約で近年建てたもの。すべて当局の検査を通過している）。胡錦濤総書記が現場に来たとき、「生態移民」牧民に「家はすぐ建ててあげます」といったら、その牧民は家はほしくない。草原へすぐ帰してほしいといった。

震災直後、6万の救災用のテントが運ばれたが、震災直後は運ぶ人がいなくて、老人、けが人、病人のために避難場所まで運ぶことができなかった。もちろん今そういう状態はない。玉樹州の人はテント・食料・金をもらった（例えば6人家族で5人まで死んだ時、生残った人はその人も含めて6人分、一人について5000元の手当てをもらえるからあわせて3万円になる）。だが被災者なのにチャムド（昌都）地区の人、四川カン

ゼ州の人は一時救済の対象にならなかった。家族全員死んで老人夫婦だけ残されたものもいたがテントもない。

(阿部注、これに関連するニュースが日本のネットに載った(2010.5.28 共同)。このニュースは本当らしく見えるが、どこまでが事実か確認できない。「青海省地震で被災した同省玉樹チベット族自治州玉樹県結古鎮の州政府庁舎前で22日、被災者ら数百人が政府に対し支援物資や救済金を要求するデモを行った。デモ参加者の大半はほかの地域から結古鎮に移り住んだ住民ら。地元で戸籍がなく、正式な被災住民として認定されていないため、必要な援助が受けられないことに抗議した。被災者を装って救済金などを手にしようとするケースも考えられ、地元当局は、被災認定には一定時間がかかると説明しているという))

チベット人地域は方言や文化の違いで、ラサ・シガツェ地域のウィ・ザンとカムとアムドに分かれる。自治区のチャムド地区や四川カンゼ州の人はカムパ(カムの人)だ。青海省は玉樹州だけがカムパで、そのほかはアムド。だからアムド地区の我々が救援に入っても方言の壁があつてなかなか意思が通じない場面もある。西寧などの病院では漢語しかできない医者や看護婦がいるのもっと深刻だ。

「青海藏族研究会」などボランティア団体が青海の大きな病院を巡回して負傷者から「なにをしてほしいか」調査したところ、「家族と会いたい」「父母はどここの病院にいるか、友達は？」という声があつた。倒れた住宅から引っ張り出して、けが人を西寧など都市の病院に空輸したのは良かったが、輸送途中で一家バラバラになった家族がかなり出た。数日の入院で回復した人は親戚友人の消息を知りたがった。NPOは少しでも早く気持ちを安定させるために、重傷者やその家族の名前を記録して消息を探した。これは同じチベット人でもアムドの人はかなり難しく、やはりカム方言ができないとだめだ。

被災現場じゃ考えられる悪いことはたいていあつたのではないかと。泥棒もあつた。倒れている人の金の指輪を盗ろうとしたら、けが人が気がついて短刀を引き抜いて泥棒を刺した。泥棒はいま西寧の病院に入院している。

いま災害復興に入っているが、ジェクンド(結古)の町とその周辺ではやや事情が違っている。4月20日、ジェクンドの近くの農村へ行ったが、家は程度の違いはあれ全部壊れていた。いまも農牧地帯には救災用テントなしの人がいる。急いで隣接するナンチェン県や四川省カンゼ州北部など農牧村をひとつひとつ援助しないとイケない。

家を再建するなら80平米までだが12万円もらえることになっている。これは西寧の基準からすれば高いかもしれないが、向こうは奥地ですから建材が高い。木材はもちろん煉瓦もセメントも高い。西寧から820キロもあるのだから。

実際に支援をしてみて、盲目的な支援は不要だしじゃまだし、交通が渋滞したりすることがわかつた。自分の頭で考えず現地の状況を知ってからにしてほしい。だから地震発生から数週間肉親以外の民間人のジェクンド行きを止めたのはやむを得ない手段だった。

たとえば、ジェクンドではインスタントラーメンが全国から寄せられてあり余っている。チベット人は腹が減ってもラーメンを食う気にはならない。食いたいものはツァンパ(ハダカムギの炒り粉)・バター・チュラ(乾チーズ)・牛羊の肉など食べ慣れているものだ。

北京上海などからの支援物資はかなり上等で、町で売っているものも西寧にもないようなものがある。学生の制服、筆記用具などはすでに足りている。こどもの心理状態を安定させるためにも、おもちゃや本が欲しい。ジェクンドの書店が回復したが、あるのは漢語の本だけだ。

ジェクンドではチベット服はほぼ足りているが農村牧野では足りないところがあるかもしれない。いま、被災者が欲しがっているのはあれば便利な物になっている。

飛行場とジェクンドの町では送電施設がかなり早く回復したが、農村牧野では照明用の電気がない。家庭用照明に使う太陽光発電と蓄電池、また炊事用の太陽炉や小型の熱水器があれば役に立つと思う。とにかく玉樹州は晴れの日が多い地方だから。

ジェクンドの町のごみは6月10日までに片付ける予定である。

住宅をどう再建するかは検討中だが、この地方は数百年ごとに地震がある。中央は住宅も含めて建物はすべて8級(マグニチュード?)の地震にも耐えられるようにするという。ジェクンドじゃ7.5級でもいいじゃないかという話がある。現場に降りてくるとだんだん格下げになる。

遺体は火葬にした。16日に土葬にするという話があつたけど、私は反対した。土葬は何か悪い死に方をした人にするものだ。火葬は我々チベット人には最良の方法だ。チベット人はこの世界は水・風・土・火でできていると考える。火葬なら元の水や火になって天に上る。その日14人を天葬(鳥葬)にしたが、一度に14人では鳥が少なくてだめだった。

火葬など遺体の葬儀は坊さんが全部やったが、これも伝統に従っていてよかったと思う。場所は天葬場の近くだ。風通しを考えて遺体は鉄の枠の上に並べておいてポリバケツでガソリンとバターを運んで、坊さんの読経の中で焼いた。

高級中学までの学生が孤児になった時、政府は生活費学費全部援助する。大学生は見舞金だ。5000人の児童生徒がいるが、7つの省に移動させる計画があり、すでに省内の天峻や同仁、チャブチャに移動して授業

を受けている。西寧市内の3つの大学にもいる。省外に移動したくなければ行かなくていい。チベット語を勉強するならチベット人地域に移動しなければならない。北京上海などの学校へ行くならあちらではすべての面倒を見てくれるが、チベット語はだめだ。

青海民族大学に玉樹出身の学生が331人が在籍しているが、うち275人が家が倒壊するなどの被害を受けた。そのうち9人が直系親族(親)を失っており、完全に経済的な支えが無くなっている。授業料は年3200円で、年間寮費は1000元、生活は月に500~700元である。

この状態は青海師範大学や青海大学にもある。

以上

【中国経済最新統計】(試行版)

上海センターは、協力会会員を始めとする読者の皆様方へのサービスを充実する一環として、激動する中国経済に関する最新の統計情報を毎週お届けすることになりましたが、今後必要に応じて項目や表示方法などを見直す可能性がありますので、当面、試行版として提供し、引用を差し控えるようよろしくお願いいたします。 編集者より

	① 実質 GDP 増加率 (%)	② 工業付 加価値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億 ^米 ドル)	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009年	8.7	11.0	15.5	1.9	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2008年												
4月		15.7	22.0	8.5	25.4	164	21.8	26.8	▲16.7	52.7	16.9	14.7
5月		16.0	21.6	7.7	25.4	198	28.2	40.7	▲11.0	38.0	18.0	14.9
6月	10.4	16.0	23.0	7.1	29.5	207	17.2	31.4	▲27.2	14.6	17.3	14.1
7月		14.7	23.3	6.3	29.2	252	26.7	33.7	▲22.2	38.5	16.3	14.6
8月		12.8	23.2	4.9	28.1	289	21.0	23.0	▲39.5	39.7	15.9	14.3
9月	9.9	11.4	23.2	4.6	29.0	294	21.4	21.2	▲40.3	26.0	15.2	14.5
10月		8.2	22.0	4.0	24.4	353	19.0	15.4	▲26.1	▲0.8	15.0	14.6
11月		5.4	20.8	2.4	23.8	402	▲2.2	▲18.0	▲38.3	▲36.5	14.7	13.2
12月	9.0	5.7	19.0	1.2	22.3	390	▲2.8	▲21.3	▲25.8	▲5.7	17.8	15.9
2009年												
1月				1.0		391	▲17.5	▲43.1	▲48.7	▲32.7	18.7	18.6
2月		(3.8)	(15.2)	▲1.6	(26.5)	48	▲25.7	▲24.1	▲13.0	▲15.8	20.5	24.2
3月	6.1	8.3	14.7	▲1.2	30.3	186	▲17.1	▲25.1	▲30.4	▲9.5	25.5	29.8
4月		7.3	14.8	▲1.5	30.5	131	▲22.6	▲23.0	▲33.6	▲20.0	25.9	27.1
5月		8.9	15.2	▲1.4	(32.9)	134	▲22.4	▲25.2	▲32.0	▲17.8	25.7	28.0
6月	7.9	10.7	15.0	▲1.7	35.3	83	▲21.4	▲13.2	▲3.8	▲6.8	28.5	31.9
7月		10.8	15.2	▲1.8	(32.9)	106	▲23.0	▲14.9	▲21.4	▲35.7	28.4	38.6
8月		12.3	15.4	▲1.2	(33.0)	157	▲23.4	▲17.0	▲2.05	7.0	28.5	31.6
9月	8.9	13.9	15.5	▲0.8	(33.4)	129	▲15.2	▲3.5	10.6	18.9	29.3	31.7
10月		16.1	16.2	▲0.5	(33.1)	240	▲13.8	▲6.4	▲6.2	5.7	29.5	31.7
11月		19.2	15.8	0.6	(32.1)	191	▲1.2	26.7	10.0	32.0	29.6	34.8
12月	10.7	18.5	17.5	1.9	(30.5)	184	17.7	55.9	9.7	-44.6	27.6	31.7
2010年												
1月				1.5		142	21.0	85.6	24.7	7.8	26.0	29.3
2月		(20.7)	(17.9)	2.6	(26.6)	76	45.7	44.7	2.5	1.1	25.5	27.2
3月	11.9	18.1	18.0	2.4	26.3	▲72	24.2	66.4	28.1	12.1	22.5	21.8
4月		17.8	18.5	2.8	25.4	17	30.4	50.1	21.3	24.7	21.5	22.0

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期(四半期)比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。
 2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1月と2月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、()内の数字は1月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。
 3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の86%(2007年)を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。
 出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。